

「未来をになう長浜っ子」育成プロジェクト 第1回ワーキング会議 議事要点録

I 日時 令和3年5月10日(月)15時00分～16時45分

II 場所 長浜市役所本庁舎多目的室1～4

III 参加者 ワーキング会議委員35名(2名欠席)

板山教育長、清水教育委員会事務局次長、教育指導課 筧課長、幼児課 主馬主幹、
教育センター 上橋研究員、教育改革推進室 中北室長、鐘居副参事、
栗林推進員、三田村

IV 内容

1 開会 教育長より開会のあいさつ

- この教育の激動期ともいえる時代において教育委員会レベルでも様々な協議会があるが、先生方をお願いしているこの未来プロジェクトは、最も期待している協議会の一つである。
- 先日、本を読んでいると、このような内容のことが書かれてあった。学力を高めなくてはならないといわれている中で、PISAの調査では日本はどんどん成績が落ちてきた。これは何とかしなくてはということで、ゆとり教育からの脱却とか学習指導要領の改訂とか、様々な形になってきた。
- 過去にPISAの調査でよく取り上げられたフィンランドという国は、世界一の教育とも言われ、旧湖北町では教員の研修先にもなっていた。しかし現在の状況は、以前とは異なってきている。調査3科目の平均を見ると2006年がピークで、それ以降の調査では下降線をたどっている。具体的には、前回の調査を見てみると、数学において日本は加盟国中6位、アメリカ37位、フィンランドはどうかというと16位であった。理科は日本が5位で、フィンランドは6位。よくいわれる読解力は日本が15位で、フィンランドが7位であった。
- しかし、このPISAの調査とはOECDという国際機関がした調査である。OECDとは経済協力開発機構で、戦後、マーシャルプランに基づき、共産圏に対抗するためアメリカ主導で作られた組織である。いわゆる、経済力を高め発展させていくことを主たる目的とした組織が、「自分たちの国の経済を発展させていくために、『どういう教育を』『どういう人材を』という視点から行った調査である。しかも、母体は欧米諸国であるので、欧米諸国流の読解力の調査がPCの端末を使って行われたということである。
- こういうことを考えずに、日本の読解力が15位だという結果だけをみると、日本の子ども達の読解力が落ちてきたというイメージを与えてしまう。これは物事を、ある一方向からしか見ていないということであり、大きな誤りであると考える。
- みなさんも知っておられると思うが、EdTech(エドテック)という政策を進めているのは、経済産業省である。文部科学省ではなく、経済産業省がなぜこれを推進しているのか。日本の国の経済、国力を発展させていくためには、『どういう人材が』『どういう教育が』求められている

のかという必要性から生まれてきた一つの教育の手法ということである。

- 何を言いたいかという、端的に物事のある一面から見ているだけでは状況はわからないということである。今はSNSなどで様々な情報を目にし、耳に入ってくるが、それが本当に正しい情報なのかという事である。それらを判断する能力は子どもも大人も、これからの社会を生き抜くために欠かすことができないものである。
- そういうことから、皆さんの取組に非常に期待していることは、目にし、耳にする情報からではなく、ゼロの視点から、全く新しい視点から考えていただき、現場での状況をそこに織り込み、新しい形を皆さんの力で1つでも2つでも出していただきたいということである。
- 学校訪問をすると、学力を高めるためには授業改善が急務とよく言われる。改善というなら、課題が明確になっていないと改善のしようがない。例えば、血糖値が高いと食生活を改善しようとする。では、学校では何が問題だから授業を改善するのか。授業のどこが問題だからそれを改善していかなければならないのか。それが無いのに授業改善と言っても前には進まない。そのために必要なことは、子ども達の実態・状況を正確に把握することが一番大切なことである。
- テストをすればいいとかそういうことではない。自分の授業なら、授業のどこに問題があるのか、子どもたちはどう考えているのか、それを客観的な指標でみるとどうなのか、だからこの課題を解決するためにこういう手段を取ればうまくいくのではないか。こういうサイクルを回していかなければ、いつまでたっても現状は変わらない。
- 学校生活に適応できない子どもたちを大学の先生に来ていただいて観察していただくと、成育歴に問題とか、愛着関係とか、自己肯定感などよく言われる。自己肯定感が低ければ、自己肯定感をどうやって高めるのか。マイナスの部分プラスにもっていくのか。具体的な方策・手段を考えなければいつまでたっても行ったり来たりするだけに終わる。
- 学校で行われている学校評価では、肯定的評価が何%とか結果としては出てくる。「授業がよくわかる・まあまあわかる」の肯定的な回答が 80%以上あったとしても、基礎的な力がついていないとすれば、むしろ残りの 20%の子どもたちがその答えを持っており、我々はそこに目を向けないといけない。肯定的回答で喜んでいてはいけない。皆さんが持っている学級でアンケートをすれば、肯定的答えをするのが当たり前で、子どもが否定的な回答をするのはとても勇気がいる事だということを知っておいてほしい。
そういう調査をかけなくて、子どもたちの真の姿をつかむにはどんな方法がよいのかという視点・立ち位置でこのワーキングの話し合いを是非進めていただきたい。
- 皆さんが流す汗は、子ども達の笑顔に直結していく。教育委員会だけでなく、学校、子ども保護者、地域もこの取組を注視しているということを胸において取り組んでいただけるとありがたい。

2 委員就任依頼状の交付 ワーキング会議委員に対して教育長より就任依頼状を手交

3 事務局説明 事務局より資料にもとづき説明

4 グループ協議 A～Hの8グループに分かれて協議

詳細は別紙参照

(1)自己紹介

(2)GL/SGLの選出

(3)活動内容の検討(①現状分析・成果と課題の共有 ②テーマ設定 ③コア会議メンバー決定)

6 事務連絡

7 閉会 中北室長より閉会のあいさつ

○ これまで中学校区を基本単位としながら1年目は15名、2年目は25名、そして今年度は、市内全小・中・義務教育学校より校長の推薦を受けた35名の先生方による～学力向上に向けた確かな実践の推進～を目標に掲げた取組がスタートした。

この学力向上に向けた確かな実践の推進は、2年間の成果と課題を踏まえたものである。

○ 皆さんの学校には、毎年例外なく(一定の成果)を上げている教員はおられるのではないだろうか。なぜかあの先生が担任すると、やんちゃな子どもが落ち着いてしまう。あの先生の学級は文化祭でも合唱コンクールでも必ず質の高いものが生まれる。あの先生が担当しているクラスは他の先生が担当したクラスに比べて明らかに平均点が高い。そんな先生である。

実はこうした教員の存在は、教育の成果が短期間で表れ得ることを示している。もちろん、こうした教員は少数であるかもしれないが、少なくともやり方次第では、教育の成果が短期間で表れ得ることの証左である。私も含めすべての教員がまずはこの認識をもつことが大切だと思っている。

○ では、毎年、例外なく(一定の成果)を上げている教員は、他の教員たちと何が異なるのか。

北海道に堀 裕嗣(ほり ひろつぐ)という中学校の国語科授業の研究を続けられ、「研究集団ここのは」を設立された方がおられる。著書「教師力アップ 成功の極意」の中で、多くのすぐれた同僚を観察してきて毎年、例外なく(一定の成果)を上げている教師には二つの特徴があると記されている。

○ 一つは「理想を高くもっていること」。

例えば、一般的に子どもが教師の指導内容の6割を習得することが平均である、と考えてみると、10の理想を掲げる教師のもとでは生徒たちは平均6の習得しか示さない。しかし、15の理想を掲げる教師のもとでは、生徒たちは平均9の習得を示す。この単純な原理を侮ってはならない。かつて、「〇〇中学校の生徒だから仕方ない」と職員室で口を揃えて言う学校に勤めたことがある。諦めているという口調ではなく、笑顔で許しているのである。つまり、生徒たちをかわいが

ってはいえるのだが、甘いのである。理想が低すぎるのである。私はこの学校に勤めている間、すべての提案において生徒指導でも教科指導でも先生方の意識を変えることを第一義に考えて仕事をした。だいたい、1年間くらいで成果が出るようになった。

- もう一つは、「自分のやり方だけに固執せず、生徒たちの状況を見ながら手立てを打つこと」である。教師は「自分のやり方」に固執しがちであり、「自分のやり方」から漏れる生徒は「悪い生徒」と断罪しがちである。しかし、それは多くの場合、その「やり方」が狭いのである。この意識をもっているか否かが教師として長くやっていけるか否かの生命線であるとさえ言える……私はそう考えている。

- 本日、それぞれのブロックごとに、テーマを決定していただいた。

また、後半、コア会議では、具体的な取組について話し合っていた。

何かを始める、何かを続けるためには覚悟が必要である。すべての実践方法は「続けること」が前提で、続けることによって、子どもたちにじわりじわりと浸透していく。効果が出てくる、それを前提として考案されている。しかも、すべての実践方法は、「それを続ける教師が試行錯誤のもとに改良すること、そしてそれを交流することによってさらに良い方法へと進化されること」を期待して提案されている。こうすれば完璧に機能するからこのやり方だけで改善も改良もするという提案の仕方をしているものなど、この世に一つもない。

- これからの実践をとおして、結果を出すことに是非貪欲になってください。結果を出すためには、肅々とこなさなければならない現実が当然出てきます。また、現実を避けて結果が出ないと悩む場面が出てくるかもしれません。そのような時は、今年度のコア会議・ブロック会議のメンバーや各校の管理職の先生方にも相談してみてください。

5月の校長会、教頭会では、ワーキング会議の先生方から相談があれば管理職よりアドバイスをいただけるようお願いをしたいと思います。また、事務局教育改革推進室の職員も可能な限り、ブロック会議・コア会議に参加し、汗をかきます。

先生方の学力向上に向けた実践により、長浜の子どもたちの未来が確かなものとなることを期待しております。どうぞ、一年間よろしくお願いいたします。